

氏名(本籍)	李俊球(韓国)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	博乙第743号
学位授与年月日	平成4年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	韓国近代の思想と教育 ——民族意識の屈折と展開——

主査	筑波大学教授	鈴木博雄
副査	筑波大学教授	教育学博士 下村哲夫
副査	筑波大学教授	教育学博士 太田信夫
副査	筑波大学助教授	柳本雄次
副査	筑波大学教授	教育学博士 成田十次郎
副査	筑波大学教授	斉藤太郎

## 論文の要旨

### (1) 本論文の構成

本論文は序論、本論、結論の三部から成り、本論は五章で構成されている。本文348頁ほかに参考文献リスト19頁よりなっている。

### (2) 本論文の目的と方法

本論文は韓国の近代教育の思想的基盤となった民族意識が変革期の思想と教育によって如何に形成され、それが近代教育の発展に如何なる影響を与えたかについて解明せんとするものである。本論文が研究の対象とする時期は「韓国近代」、即ち朝鮮末期の1860年代から1897年の大韓帝国成立期を経て日本によって併合された1910年までである。本論文は、まず、韓国近代における民族意識の形成に寄与した思想や教育について考察した。これにはこの時期における主要な思想である衛正斥邪思想、東学思想、開化思想と近代的民族意識の形成についての関連を明らかにした。ついで民族意識が歴史変革の主体としての国民の形成を目指す近代教育を発展せしめた過程をキリスト教系諸学校や民間の私立学校などの近代学校の設立の過程などを中心に解明したものである。

なお、この韓国における近代教育の形成と発展を考察するに当たり、本論文は日本の近代教育の形成と発展に関する日本モデルを念頭において、韓国の近代教育の形成と発展を考察した。これによって韓国における近代教育の形成と発展の特性を一層明確にすることに成功したのである。

### (3) 研究成果の概要

第1章では近代化以前の朝鮮期の伝統的な民族意識の形成に寄与した儒教思想とその教育について考察した。即ち、1節では朝鮮期の支配的イデオロギーであった朱子学の形成過程と韓民族の華夷思想の形成過程を明らかにした。2節では李朝期の儒教に立脚した学問と教育制度について考察した。3節では韓国近代の開化思想の源流となった実学思想、とりわけ、その経世思想について解明した。4節では実学思想の近代化と民族意識への影響を明らかにした。

第2章では近代化初期の思想と教育について考察した。まず、1節では国内の階級対立による封建体制の解体過程と外国勢力の到来が民衆の民族意識の覚醒をもたらした過程を明らかにした。2節では、衛正斥邪思想が伝統的保守思想であることを解明し、その社会的基盤は兩班階級にあることを明らかにした。3節では、東学思想の内容を考察し、それが「反封建」、「反侵略」という政治的イデオロギー性を持つことを明らかにし、それが民衆の内からの民族意識を覚醒させるのに役立ったことを論証した。4節では開化思想の淵源を実学思想に求められることを立証した。

第3章では、近代期の思想である開化思想について考察し、それと民族意識の形成の関連について解明した。つぎに近代学校の設立過程を考察し、それと民族意識の形成の関係を明らかにした。すなわち、1節では開化思想が近代的民族意識の形成に大きく関与していることを論証した。2節では韓国近代化に影響を及ぼした韓国をめぐる国際情勢について分析し、それが民族意識の覚醒を触発したことを明らかにした。3節では、近代学校の設立過程を詳細に考察し、その社会的性格を解明した。4節では甲午改革によって「近代」が定着したことを立証し、この改革が近代的な新学制の実施に大きな役割を演じたことを指摘した。

第4章では、韓国近代におけるキリスト教系諸学校や民間の私立学校の設立と民族意識の関係について考察した。すなわち、1節では、まず韓国におけるキリスト教系諸学校の成立に関する歴史的考察を行い、それら諸学校が韓国の近代学校の発足に大きな役割を果たしたことを明らかにした。ついで、2節では、日本の教育支配に反抗する民衆の民族意識が民間の私立学校を設立させ、それらが、その以後の民衆の民族意識の育成に大きな功績があったことを論証した。3節では、開化派が提示した教育思想や教育改革案が、韓国の近代教育の原点になったことを明らかにし、それは開化思想が旧教育の内在的克服と新学制の展開を支える思想的根拠となったことによることを明らかにした。当時の新政府の教育的課題としては、まず、第一に国民教育(小学校)の確立が挙げられ、それを実現するためには、教員の養成(師範学校)や外国語を駆使できる人材を養成することになった。他方、新しい教学的秩序を確立するためには、旧時代の最高学府である成均館の改組も課題となったが、この点についても、その改革の過程を解明した。

第5章では、韓国近代における民族教育の屈折の過程について考察し、独立協会が実施した民族教育が民衆の民族意識の昂揚に大きな役割を果たしたことを論証した。さらに、独立協会の諸活動は甲午改革の思想を継承し、深化させることに役立ったことを事例に即して明らかにした。

以上の考察と論証とにより、まず、韓国近代の民族意識の形成過程とその性格を明らかにした。ついで、近代的民族意識によって触発された韓国近代の教育が内外の諸情勢によって複雑に屈折しつつ展開した民族意識と不可分に関連しつつ形成され、展開された過程が明らかになった。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、韓国近代の民族意識の形成と展開が韓国の近代教育の発達に不可分の関係にあることを実証的に論証した画期的な論文である。これまで、この研究題目に関する日韓両国の学問的業績はきわめて少なく、その水準も必ずしも高いものとは言えないものがあった。本論文は日韓両国におけるこの研究分野での基本的業績として高く評価されるものである。

本論文は、韓国の近代教育の形成と発展を日韓中の近代化の歴史過程の視野のなかで考察したもので、まず、その独自の視野の広さと比較的な考察の方法が本論文の独自性を示している。このような研究方法による論証には、日韓中三国の教育の近代化に関する該博な知識と多年にわたって蓄積された研究業績がなければ不可能に近いことであるが、本論文は、筆者がこの点に関して十分な知識と業績を有していることをよく示している。

韓国近代の歴史的研究においては、日本のそれに比し、基本的な史料蒐集の点で非常な隘路が存在することはよく知られているところである。しかるに、本論文では、日韓両国に所蔵されている諸史料を丹念に調査、蒐集して見事にこの困難点を克服している。この点は本論文の巻末に付記された参考文献のリストがこれを証している。

本論文は、論の構成は堅固かつ確実であり、論証の方法は緻密な論理で表現されている。史料の選択、論証の方法においてもバランスのとれた適切なものとなっている。今後、日本統治期における民族意識の発展と教育の発達にまで研究が進められることが期待される。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。